

文学部先輩相談室

太田裕信・小鹿原敏夫・藏口佳奈・長岡徹郎・根無一行・方俊植

1. 相談室の概要

文学部先輩相談室は、文学部・文学研究科の学生の研究・進路・生活上の問題を解決する一助となるべく、2009年11月に設立されました。相談員は文学研究科の博士課程を終えた若手研究者が務め、あくまでも「先輩」の立場から相談者の研究・進路・生活上の問題に耳を傾け、必要な情報を提供するという形で運営されています（相談員は正式には文学部教務補佐という身分で勤務しています）。文学研究科には五つの専攻（文献文化学、思想文化学、歴史文化学、行動文化学、現代文化学）が存在しますが、現在勤務している相談員は、文献文化学、思想文化学、行動文化学専攻の出身ODで構成されています。

先輩相談室の主な業務は、来室された相談者からの相談を受け付けることです。相談内容は相談者の属性によって異なります。学部生であれば履修登録、教職取得、大学院進学といったことが大半を占めています。大学院生では、今後の進路についての相談が多く、研究職の現状について情報を得る場所があまりない学生たちにとって、先輩相談室は貴重な場となっているようです。

このように明確に相談内容を持っている相談者がいる一方で、漠然とした悩みを抱えて来室する相談者もいます。その際は、いっしょにその漠然とした悩みに輪郭を与え、その悩みに寄り添いながら、解決の方策を模索しています。

こうした通常の相談の業務に加えて、先輩相談室は、年度はじめの1、2回生の履修ガイダンス、後期開始前に行われる1回生を対象とした歓迎夕食会など、文学部の年中行事にも携わっています。相談室・文学部共催の2回生ガイダンス（4月上旬）では、文学部の便覧・シラバスの見方、資格、教職などについて具体的にアドバイスしています。また文学部主催の新入生ガイダンス（4月上旬）では、先輩相談室の紹介と教職を取得するにあたっての簡単な説明を担当しています。歓迎夕食会とは、学部の専修分属ガイダンス（9月下旬）に引き続いて行われる相談室主催の立食パーティー型のイベントです。歓迎夕食会の趣旨は、立食パーティーという肩肘のほらないかたちで、1回生が各専修の教員・上回生と自由に交流する場を提供することです。学生たちはこの立食パーティーを参考にし、専修を選ぶことができるわけです。例年、参加した学生からは「自分の疑問を先輩や教授に直接尋ねられたのはとてもうれしかった」や「文学部のイメージが変わった」などの感想があり、大変好評でした。また、先輩相談室のことを周知する機会にもなっています。2回生ガイダンス・歓迎夕食会については、アンケートを実施し、その結果をHP（<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/gakuseisoudan/gsp-enquete/>）上に公開しています。

2. 相談室の利用方法

現在、先輩相談室は月・水・金の14時から16時までのあいだに開室し、開室時にはTwitter (@gakuseisoudan) で開室情報を提供しています。どの曜日でも相談員は2名以上在室していますが、相談員は曜日ごとに固定されています。そのため、HP (<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/gakuseisoudan/>相談員紹介) に掲載されている情報を見て、相談者自身の悩みに合致する相談員を選んで来室してもらうことも可能です。

相談者が来室されると、相談員が手短に自己紹介した後で、簡単な決まり（相談者は名乗る必要がない、時間は40分程度、等）を読んで頂き、その後は自由に話してもらうという流れです。相談中は、常に相談室のドアは開放し、窓のカーテンも全開にしてあります。相談の内容によっては、相談員がカウンセリングの専門家ではない旨を伝えた上で学生総合支援センターカウンセリングルーム等を紹介する場合があります。

メールでの相談は基本的には受け付けておらず、原則的には直接来室してもらうようお願いしています。ただ、遠方に居住されていて足を運ぶことが難しいなどの事情がある場合には、メールで対応することもあります。

3. 相談室の利用状況

先輩相談室の利用者の属性は、学部生・院生・社会人など多岐にわたっており、必ずしも文学部・文学研究科に在籍されている方ばかりではありません。

相談室の利用状況は下記に示した通りです。年によって相談者数が変動しますが、前期の初めや後期の初めには履修に関する悩みなどが目立ち、相談者数が増える傾向にあります。

<利用状況についての基本統計>

2010年度25名、2011年度60名、2012年度34名、2013年度28名、2014年度29名、
2015年度36名、2016年度30名（1月16日現在）

4. 問題点と展望

当相談室は、文学部にあるため文学部の学生専用だと思われるかもしれませんが、どなたに対してもオープンな場を提供しています。Twitterでは開室情報を提供していますし、HPにも過去のガイダンスで得たアンケート結果を開示するなど、身近に感じてもらう様々な活動を行っています。

しかしながら、現状ではその事実があまり知られておらず、宣伝活動が行き渡っているとは言いがたい状況にあります。今後は周知に務め、よりオープンな相談室として機能できるように努力していきたいと思っております。具体的な方策として、以下の7点を挙げたいと思っております。

(1) 宣伝に力を入れる

現在はガイダンスでの宣伝の他、ウェブサイト、ツイッター等で広報をしているが、今後はたとえばパンフレットやポスターの掲示を増やしたり、生協の機関紙「らいふすてーじ」や「京都大学新聞」などに紹介文の掲載を依頼したりすることが考えられる。

(2) 開室の時間帯の再検討

これまでの学生のアンケートには「相談室に行きたいが、授業の時間と重なるため行けない」という意見があった。授業時間以後の開室は難しいと考えられるため、昼休み（12時から13時）を開室時間のなかに入れることも考えられる。

(3) 女性の相談員の増員

女性にとっては女性の相談員の方が相談しやすいように思われる場合がある。過去には半数ずつの時もあったが、現状では女性の相談員は1名となっている。

(4) 相談室に入りやすい雰囲気づくり

たとえば、コーヒーや紅茶を用意しておけば、本当のところは相談室に行きたいが、やや恥ずかしくて行けないという学生も、休憩を口実にして来やすくなるのではないか。ただし、そのためには経費が必要になる。

(5) プライバシーの問題

後から入って来られる相談者は「今部屋には他の相談者がいる」とわかって入って来ていると思われるが、先に相談を受けている相談者がそのことを知られたくない場合があるかもしれない。また、後からの相談者がプライバシーを気にして「今の相談が終われば次に入ろう」と待っていることもあるかと思われるが、相談内容によっては40分という原則時間を延長するときもあり、その場合、次に入ろうと待っていたであろう相談者の相談機会を奪っている可能性もある。

(6) 複数の相談者への同時対応について

複数の相談者が一度に来て困ることがある。完全予約制にすれば解消できるが、しかしもし完全予約制にすれば現在の「気軽」という特徴が失われる。そこでたとえば、来室者が来られたドアに「現在相談中、次14時40分から」などといった張り紙をすることが考えられる。

(7) 相談室を学校に来るきっかけに

大学に来ることができず、誰にも相談する機会を持たない学生を相談室に呼ぶことができないか。相談室に来ることが、再び大学に来るきっかけになるかもしれない。そのような大学との関係が切れてしまっている学生に対してどのようにアプローチをしていけばよいのか検討するべきではないかと思われる。

